

科学博物館における マンガ展の開催に関する考察

国立科学博物館 栗原 祐司

1. はじめに

2025年10～11月に、国立科学博物館において企画展「学習マンガのひみつ」を開催した。近年は博物館でもマンガとコラボした展覧会やマンガを活用した展示、解説等も行われるようになってきているが、そのためには著作権や著作隣接権等をはじめ、いくつかの課題がある。

本発表では、科学博物館において、専門性の高い内容をマンガというコミュニケーション手法によってわかりやすく伝えるための課題等について考察する。

2. 学習マンガ展開催の趣旨

1) 背景

近年、教育関係者やマンガファン、出版関係者など、様々な立場の人々から「学習マンガ」が注目されている。学校図書館や書店の児童書コーナーには、これらの書籍が並ぶ棚が大きな一画を占め、戦前からの古い歴史もあり、また大きな出版市場を形成しているジャンルであるにもかかわらず、これまでその全体像を俯瞰するような書籍や展覧会は存在しなかった。本企画は、“見えないマンガ”と言われる「学習マンガ」を、多角的に紹介する初めての展覧会であった。

もちろん、これまでも日本マンガ学会等において学習マンガに関する論文や研究発表はあり、博物館関係学会等において博物館と学習マンガに関する研究発表も行われている。筆者も日本ミュージアム・マネジメント学会第15回大会（2010）で「マンガによるミュージアム・リテラシーの向上」というテーマで、福島県いわき市で開催された第10回世界水族館会議（10th International Aquarium Congress 2018 Fukushima）で「Aquariums in Manga – Possibility of Aquarium Education」というテーマで発表を行った。また、日本の国公立美術館が初めて正面から「マンガ」に光を当てたとされている東京国立近代美術館の「手塚治虫展」が1990年に開催されて以降、多くの博物館や美術館、文学館等でマンガ展が開催され、2012年に六本木ヒルズ森アーツセンターギャラリーで開催された「ONE PIECE 展」は、90日間の会期中に51万人を動員した。海外でも、2019年にイギリス・ロ

ンドンの大英博物館で開催されたマンガ展「The Citi exhibition Manga」には、約3ヶ月の開催期間中に約18万人もの来場者があり、アメリカ・サンフランシスコのデ・ヤング美術館で開催中（2026年1月25日まで）のマンガ展「Art of Manga」には、2025年9月27日の初日に、2000年以降の同館の記録で最高の8,324名の来場者数を記録した。2019年9月に開催されたICOM（国際博物館会議）京都大会では、「〈マンガ展〉の可能性と不可能性：英韓日の比較から（Possibilities and impossibilities of exhibiting Manga/comics: A comparison between Manga/comic exhibitions in the UK, South Korea, and Japan）」というプレナリー・セッションも開催された。

2) 意義

今やマンガは世界的にも日本を代表する文化であると言ってもいいが、その一類型である学習マンガについては、多くの日本人が図書館や学校図書室で親しみ、近年は書店でも一つのコーナーが設けられ、さらに「学習マンガ」としてカテゴリ化されていない『あさきゆめみし』（大和和紀 1979～ 講談社）や『ベルサイユのばら』（池田理代子 1972～ 集英社）等の娯楽・ストーリーマンガが、無意識的に学習的な要素を有している実態がありながら、これまでその全体像にフォーカスした展覧会は行われてこなかった。

これまで多くの来場者を集め、注目されたマンガ展は、「進撃の巨人展」、「荒木飛呂彦原画展 ジョジョ展」、「水木しげる展」等、既に人気があり、固定のファン層がいるマンガ家やその作品、あるいは雑誌等に関するものであった。展覧会の主催及び共催者は、当然入館料等の収入を確実に確保できることを見越した上で展覧会を企画しており、学習マンガを専門とするマンガ家にも一定のファンはいるものの、学習マンガ展では確実に集客効果が期待できないのが実態であろうと思われる。いわゆる学習マンガが、“見えないマンガ”と言われる所以である。

周知のとおり、国立科学博物館の前身は教育博物館であり、2年後に開館150周年を控えた今、これまで開催されていない「学習マンガ」に関する企画展を開催することは、当館の歴史のみならず日本の博物館史、さらにはマンガ研究の歴史においても十分な意義があると考え、常設展料金で見学できる企画展として「学習マンガのひみつ」展を開催した次第である。

企画に際しては、外部から学習マンガに関する多くの研究実績がある京都精華大学国際マンガ研究センター特任教授の伊藤遊氏、京都産業大学現代社会学部教授の山中千恵氏、公益財団法人東洋文庫研究員で歴史学習マンガ家の瀧下彩子氏に監修をお願いした。いずれも「学習マンガ研究会」として活動をしており、本展に先立ち、9月6日に東洋文庫アカデミア（生涯学習講座）で国立科学博物館企画展連携講座として、「学習マンガのひみつ—その過去と未来、メディアとしての可能性—」を開催した。また、当館からは、筆者と植物研究部陸上植物研究グループの永濱藍研究員が監修し、永濱藍研究員には主に植物系学習マンガの展示を担当してもらった。これまで動物園や水族館を舞台にしたマンガは数多くの作品があるが、

動きのない植物に関するマンガについてはほとんど注目されておらず、当館所蔵の植物標本に加えて、野冊や胴乱などの道具も展示したこの企画も、当館らしい展示として注目を集めた。

2. 学習マンガ展の内容

1) 展示の工夫

基本的に博物館におけるマンガ展は、マンガそのものを読ませることを目的としておらず、原画を展示する場合も、ストーリーを追うことよりも原画やキャラクターの筆致自体をアートとして鑑賞してもらうことを目的としていることが多い。しかしながら、マンガの表紙ばかりの展覧だと、中身を読みたいというニーズとストレスが発生する。予算と十分な準備期間があれば、パネル展示によってクライマックス・シーン等を表現することもできるが、そのいずれも不足していたため、企画展示室に隣接する中央ホールに本棚とベンチを複数台設置し、学習マンガの閲覧スペースとした。その結果、土・日・祝日には子どもから大人まで多くの方がベンチに座り学習マンガを熱心に読む姿が見られた。閲覧スペース用の本は、ご協賛いただいた Gakken、KADOKAWA のほかに集英社、小学館よりご提供いただくことができた。階段を上がってすぐの目に留まる位置に本棚があることで、多くの方が閲覧スペースに惹きつけられたように思われる。また、床面にはマンガの効果音が印刷されたパンチカーペットを設置し、日本館 2・3 階から見下ろしても楽しめるような工夫をした。あわせて、アイキャッチとしてタイトルロゴのカットアウトパネルを吊り下げることによって誘客を図った。

また、中央ホールでは、学習マンガを当館ならではの視点で解説することを心がけ、筆者による「科博とマンガ」展示や、永濱研究員による植物系学習マンガの展示は、アンケートでも好評をいただいた。館長を含む多くの当館研究員が学習マンガの監修を行ったり、「菌類のふしぎーきのことカビの仲間たち」展（2008 年）をはじめとするマンガとコラボした特別展や企画展を数多く開催していることに驚いた来場者も多かったようだ。

企画展示室内では、「学習マンガの歴史」を戦前から現在までの流れを年代別にたどりつつ、学習マンガがどのようなもので、どのようにして多くの人に読まれるに至ったかを説明した。

来館者の方が楽しめる空間づくりのため、企画展示室に入っただけの場所には、本棚を模した造作を設置し、いくつかのグリッド内には、本物の書籍やモニターを配置した。モニターでは、西郷隆盛のバラエティに富んだ描かれ方を紹介し、学習マンガはマンガ表現上の流行やマンガ文化そのものの社会的な位置づけの変化などによって、内容だけでなく、その表現も変容してきたことを表すことができた。

また、赤塚不二夫氏や石ノ森章太郎氏、すがやみつる氏など、人気作家の学習マンガを紹介するコーナーでは連結ケースに作家名のカッティングシートを貼ることで、誰の作品なのか一目で分かり、来館者からもわかりやすいという声があった。

なお、キービジュアルはマンガ家の久世番子氏にお願いし、チラシも雑誌風の二色刷りにした。また、久世氏が文化庁 Web 広報誌「ぶんかる」で連載中の『博物館ななめ歩き』において、本展を紹介した。

出口付近にマンガに登場する常設展示マップを作成したが、好評だったことからコピーを配布した。

2) 開催結果

本展（企画展示室）への入場者数は、機械式カウンターによる計測で 87,843 人であった。27 日間という短い期間の展示ではあったが、中央ホールでの演示がアイキャッチとなり、1 日あたりの入場者数は 3,253 人（歴代 8 位）、本館全体の企画展入場率は 37% とほぼ通常ペースであった。

関連イベントとして、11 月 3 日に日本マンガ学会長のすがやみつる氏による講演会を実施した。参加者数は関係者含め約 80 名で、愛読者の方が講演会にも多く参加され、講演会応募者の出席率は約 95% であった。

3. 学習マンガ展の課題

1) 構想段階から展示までの時間的制約

前述のとおり、本展は京都精華大学国際マンガ研究センター特任教授の伊藤遊氏と筆者が中心になって企画したが、双方ともに多くの業務を抱え、展示構想そのものは早い段階から決めていたものの、具体的な展示内容を決めるのに時間を要し、結果的に来場者から目録（展示品リスト）を望む声を多くいただきながら、配布できなかった。

これは、当館側がマンガ展を開催した経験がなく、2) で述べるような特殊事情を把握していなかったことで、より魅力的な展示を行うための時間を確保できなかったことが大きい。

2) 展示の限界

著作権法上、マンガの現物を展示すること自体は問題ないが、マンガのキャラクターや他館で展示している写真等をパネルにして展示する場合は、複製にあたるため、著作権者の許可が必要となる。このため、多くのマンガ展で展示しているようなマンガのキャラクターを拡大してパネル展示を行うための時間的制約があり、写真撮影スポットを除いた多くの場所が撮影禁止とせざるを得なかった。さらに、著作権者が物故者の場合には、その継承者が不明であることも多く、なおのこと時間的余裕をもって企画することの必要性を実感した。

同様に、原画の展示も著作者の許可が必要となる。本展では当初から原画の展示は想定していなかったが、筆者が実質的に監修したグレゴリ青山『京博深掘りさんぽ』（2023 年 小学館）の原画をグレゴリ青山氏から借用し、撮影可で展示できたのは幸いであった。（4 枚の

原画を毎週展示替。)

3) 予算不足

いわゆる学習マンガを出版している株式会社 Gakken、株式会社 KADOKAWA、株式会社 小学館、株式会社集英社、株式会社講談社の各社に協賛の依頼を行ったが、結果的に株式会社 Gakken 及び株式会社 KADOKAWA の二社の協賛にとどまった。もう少しスポンサーを得ることができれば、さらなる展示の充実やリーフレットの作成・配布も可能だったが、必要最小限の展示とせざるを得なかったのは残念であった。なお、一定以上の協賛を賜った株式会社 Gakken に対しては、閉館後に特別内覧会を行い、筆者が解説を行った。

4) 展覧会名

本展のタイトルとした「学習マンガ」は、一般名詞として使用したものだが、実は小学館が商標登録をしていた。そのため、展覧会名として使用可能かという危惧があったが、同社法務部と協議し、商用目的でなければ問題ないとのことで、そのまま使用することにした。なお、そうした理由から、Gakken は「学研まんが」、集英社は「集英社版学習まんが」、KADOKAWA は「角川まんが学習シリーズ」、講談社は「講談社学習まんが」という名称を使用している。

5) スペース不足

中央ホールの一角に展示した「これも学習マンガだ!」は、日本財団主催で 2015 年度からスタートした新しい世界を発見できるマンガや学びにつながるマンガを選出・発表し、作品を国内外の読者に届ける事業である。2020 年度より、一般社団法人マンガナイト（代表：山内康裕）主催、日本財団助成事業となった。マンガの持つ「楽しさ」「分かりやすさ」「共感力」に着目し、社会をより良いものにしていくことを目的とし、マンガを通じて「楽しみながら学ぶこと（= edutainment）」を継続的に推進しており、選書は選書委員会（委員長：里中満智子日本漫画家協会理事長・マンガジャパン代表）が合議制により決定している。

学習マンガの新たな展開として、選書の対象となった性の多様性や異文化理解、慰安婦問題、STEAM 教育、政治等を学べるマンガを多角的に紹介したかったが、主にスペース上の問題から事業の紹介にとどまった。

また、博物館を舞台としたマンガや学芸員、飼育員等の仕事を紹介するマンガ、さらには郷土の歴史や偉人、宗教の教祖を紹介するマンガ等も紹介したかったが、これらも本棚を模した造作のグリット内での陳列にとどまった。

さらに、韓国から展開されているスマートフォンを通じて閲覧するタテ読みのまんがの可能性、学習マンガの原画の保存についての課題等、多様なテーマに関する展示も考えられたが、やはりスペース上の制約から断念した。

6) 満足度の低さ

本展のアンケート調査の結果、満足・やや満足と回答した割合が全体の78%、ふつうは9%、やや不満・不満は12%という結果で、他の企画展と比べてやや不満・不満が高かった。自由記述からその理由を分析すると、まず、あさりよしとお氏をはじめとした特定のマンガ家の学習マンガが展示されていなかったことが挙げられる。一般に、学習マンガ家としては、歴史・社会分野ではムロタニツネ象、鈴木サチ、たなかじゅん、ひらたもとこ、柳川圭、土山しげるの各氏、科学・教養分野ではあさだみほ、高藤暁、あおきけいの各氏、語学・文学分野では羽賀翔一、横山雅彦の各氏が知られており、展示されていた各出版社の学習マンガシリーズに彼らの作品もいくつか含まれていたが、本展はこれらの学習マンガ家を紹介する趣旨ではなく、スペース的にも限界があったため、割愛せざるを得なかった。また、学習マンガの流れを俯瞰する展示展開であったために表紙の紹介が続いたこと、撮影不可が多く資料リストの配布もなかったことは前述のとおりで、これらが評価につながったものと考えられる。

4. 今後の展開

1) 巡回展の可能性

本展の巡回展を行う企画は今のところないが、出展したマンガのほとんどは京都国際マンガミュージアムの所蔵品と、伊藤遊氏及び筆者の個人蔵であったため、将来的に京都国際マンガミュージアムで同趣旨の企画展を開催する可能性は高い。また、当館の筑波実験植物園において、永濱研究員が企画・監修した植物系学習マンガに関する企画展を開催することについて、検討を行っている。

2) 学習マンガ家を紹介する企画展の可能性

3(6)で述べたとおり、本展では個々の学習マンガ家を紹介しなかったことが満足度の低さにつながったが、未だほとんど実現していない学習マンガ家を紹介する企画展の開催が期待される。国立科学博物館における学習マンガ展の開催を契機に、将来的に全国各地にあるマンガミュージアム等において実現することを期待したい。

3) 博物館マンガの可能性

本展では、トピック展示として「展示にもマンガを使っている！」や「国や自治体等とのコラボ」のコーナーを設けた。実際、3(5)で述べたように博物館を舞台としたマンガや広報誌等でマンガによって博物館活動を紹介している博物館は多い。今後、こうした博物館マンガがさらに発展することを期待したい。